

# 水城跡の復旧

大野城市教育委員会



写真1

水城跡は、日本の古い歴史書である「日本書紀」に天智天皇三（西暦664）年に築かれたと書かれている史跡です。現在は大きな土塁（堤）が見えるだけです。いろいろな調査の結果、この土塁とその外側（博多側）に掘った濠によって敵の侵入を防ごうとした防衛施設であることがわかっています。写真1は水城跡を西側上空から

撮影したものです。築かれてから1300年以上経っても堂々とした姿をしています。

ところが、平成18年9月の台風13号によって、水城跡の土塁上の木が根こそぎ倒れ、写真2のように根元に大きな穴があくという大変な被害を受けてしまいました。急いで修理しなければなりません。単なる穴埋めではなく築かれた当時の姿を再現する必要があります。そこで穴のあいた部分を調査したところ、写真3のように粘土と砂を交互に突き固めながら積み上げていることが分かりました。土のしまり具合から、「版築」と呼ばれる工法で築かれたものと考えられます。



写真2



写真3



写真 4



写真 5



写真 6

ところで今回の被災は、逆に考えると築造当時の水城の構造を見ることができる得難い機会でもありました。そこで、工事の途中で市民の皆さんの参加を募り、水城をより深く理解していただき、さらに21世紀の水城を造っていただく計画を実行しました。まず写真4のように、皆で土塁を観察し、粘土と砂を交互に突き固めて積み上げていることを確かめました。では、この土はどのようにして突き固めたのでしょうか。実は、水城跡でこれまでに行われた発掘調査で、棒のようなもの先端で土を突き固めた時にできたくぼみが見つかったことがあります。そこで今回は、棒よりは大き目ですが「胴突き」と呼ばれる道具を使って土を突き固めてみることにしました。写真5はその様子です。このように、皆様のご協力のおかげで修復工事は無事終了し、21世紀の水城が出来上がりました。

写真6は、別の場所で版築工法の実験を行ったものです。土塁と同様に、粘土と砂を「胴突き」を使って突き固めて積み上げてみましたが、上に人が3人乗っていますが、ビクともしていません。版築工法で突き固め、積み上げた土が非常にしっかりしたものになることが、ここでも確かめられました。